

第2章. 文明と歴史を現象思考学で読み解いてみる

2. 1. 発生、興隆、衰退、消滅するものとして文明を捉える

第1章の理解の仕方に基つけば、文明は人間が生み出したものに違いないのだが、それは何から、何処から、どのようにして生まれたのだろうか。人間が生み出したということは、無から有を生じるような発生の仕方ではないはずだ。そこで、人間が文明を生み出すプロセスについて考えを詰めていこうと思う。次いで、その興隆、衰退、消滅について考察を進めようと思う。

文明とは、人間が、それも集団としての人間が生み出すものである。その人間は世界の中で生きている。その世界とは、人間の存在と関係なしに存在する絶対的な世界ではなく、私たち人間が生きる世界である。

私たち人間が生きる世界とは、私たちがその中に在ってそこで生きながら感じ取るものであり、尚かつ私たちが働きかけ、それを受けて変化するものである。先ずは、こうした前提から出発することにしよう。

人間は自分が生きる環境から多くの現象を知覚する。知覚した多くの現象の集まりが表現する意味。それが人間が生きる世界である。即ち、人間は世界から多くのものを感じ取り、そこで生きることを通して世界に働きかけている。

人間が知覚を通して得るものは意識できる現象だけではない。それは無意識の中にも何らかのものを沈殿させる。その沈殿したものは、何らかの機会を得た時に意識に上って来る。人間が世界に働きかける時の行動は、意識にあるものに影響されるだけでなく、無意識に沈殿しているものからも影響を受けている。

人間のこうした働きかけの結果、世界には色々な変化が生じる。その変化とは、それまでは存在しなかった物の出現だったり、人間が生き易くするための環境の作り変えだったりする。また、その変化は集団の中にある複数の人間の関係の在り方にも及ぶ。

意識にある現象の集まりが表現する意味を読み解いて行動する時、その変化は通常行動に近く比較的穏やかで小さなものになるだろう。ところが、無意識に沈殿しているものが行動を支配する時、その変化は通常行動を超えて大きなものになる可能性があり、時には革命的になるだろう。

環境が人間の知覚を通して、その無意識の中に何らかのものを沈殿させることを「内的沈殿」と呼ぶ。人間の無意識に沈殿しているものが何らかの行動を誘発することを「外的具象化」と呼ぶ。

人間と世界との関係は、意識の領域における知覚と働きかけ、そして無意識の領域における内的沈殿と外的具象化、この二種類である。文明とはこの二種類の関係の中で生まれるものである。

ある文明を主たる構成要素とする世界で生きている人間および人間集団は、前述の通りその世界との間をつなぐ二種類の関係の下で活動している。意識の領域における知覚と働きかけは、その文明を補填し充実させてその発展をもたらす。

無意識の領域における内的沈殿と外的具象化は、その文明の延長線上には見えないものやその文明を否定するようなものをも生み出し、文明に革命的な変化や破壊的な影響をもたらす。

文明以前の人間および人間集団が原初に生み出した文明は、無意識の領域における内的沈殿と外的具象化を通してもたらされたと受け止めることができる。ひとたび文明を構成要素として持つ世界で生きようになった人間および人間集団は、意識の領域における知覚と働きかけによって文明を発展させ、無意識の領域における内的沈殿と外的具象化によってそれまでの文明を一変させたり、新たな文明を創生していったりしたのであろう。

現象の集まりが表現する意味として捉えられる文明とは、どのようなものなのかについて考えてみよう。第1章で知覚された現象を上げていくと次のようになる。

- ・ 農耕による食糧生産が行われる
- ・ 農産物に余剰が発生する
- ・ 人口が増えて人間集団が大きくなる
- ・ 様々な技術が発達する
- ・ 職業と階級が分化する
- ・ 公共建造物ができる
- ・ 都市が生まれる
- ・ 記録できる文字が生まれる
- ・ 支配的な芸術様式が生まれる
- ・ 生産と分配の仕組みと制度ができる

これが全部ではないが、こうした現象が多くの人間集団ごとに生まれる。それは気候や土壌などの地域性に基づいたものであり、こうした現象の集まりが表現する意味が、その人間集団ごとの風土であり文化だと言える。

そして更に、この人間集団ごとの風土と文化が、複数の人間集団の中でそれぞれの集団ごとの意味として見出され、この見出された意味の集まりが表現するさらに上位の意味として認識されるもの、それが文明だということだ。

トインビーが定義するところの、

＊個人が強く識別する、最も広範囲なアイデンティティに相当し、家族・部族・故郷・国家・地域などよりも広い、強固な文化的同一性
というのはこういったことだと受け止めることができる。

このように定義され、これまでの説明に有るような発生、興隆、衰退、消滅のプロセスをたどるものが、現象思考学で認識するところの「文明」である。

2. 2. 人間が生きる世界と関係付けて、文明の発生、興隆、衰退、消滅の連環を歴史として捉える

文明とは、人間が生きる世界に関するものだということを再三述べてきた。その人間が生きる世界は、時の流れと時代の遷移に合わせて変化してきた。比較的良く知られており、いわゆる西洋史や日本史で伝えられている事実を幾つか上げて見よう。

- ・ローマの共和制から帝政へ、キリスト教の誕生からキリスト教支配の世界へ
- ・キリスト教支配から近世、そして近代へ
- ・飛鳥、奈良、平安京の時代：力ある豪族の乱立から仏教による統治へ
- ・平安時代：権力の付属物であった武力が権力の主役へ
- ・戦国時代、江戸時代そして明治維新へ：支配の力は武力から経済力へ

以上のような変化の事実は歴史という旗の下に伝えられている。となると、歴史とはこうした事実を時間軸に沿って記録したものなのだろうか。そうではあるまい。

これらの変化は何らかの因果律に従って起こっていた訳ではなく、偶然に起こった訳でもない。これらの変化のどれにも人間と人間の生きる世界とが関わっている。人間および人間集団による、世界の知覚と世界への働きかけが関わっている。ということは、文明というものを先述の視点から捉えてこそ、歴史を論ずることが可能になると言えるだろう。

これらの変化の事実を人間が生きる世界の中で捉えてみようと思う。

ローマは建国以来共和制を採用していた。周辺の民族との戦いを制して領土を広げ、ポエニ戦争を経て領土はイタリア半島の枠を越えた。イタリア半島に本国を置き、周囲には多くの広大な属領が増えていった。本国の安全を確保するために、ローマからできるだけ遠くに国境線を設けることが求められたからである。

長い国境線の守備に軍隊は欠かせない。属領が増えるに従って膨大な軍事力が必要になり、その軍隊を統率することが国家安全のための最重要事項となるのは必然だった。こうした状況が生み出す多くの現象は、ローマの人間および人間集団の知覚するものとなって、意識的な働きかけを生み、無意識への内的沈殿をもたらしたのだ。

国境警備のための軍事費の増大、軍用道路などのインフラの整備、そして新しい制度としての帝政の確立といったことが実現したのである。こうした事実は、文明の推移や変化として捉えるのが妥当である。

キリスト教の誕生にも、人間および人間集団とその生きる世界との間の知覚と働きかけが大きく関わっている。本国の安全を確保するためにローマは、広大な属領が外界と接する国境線に絶え間なく軍を派遣していた。

属領では国境警備の軍に守られて属領の民たちが農耕を行い、軍の基地や冬営地では将兵たちが外敵の侵入を防ぐために戦っていた。軍の移動や食料の運搬のための道路建設も常態となっていた。

版図がイタリア半島周辺に限られていた時代には、ローマ人の腹を満たす食料生産は、シチリア島の大農場群だけで充分だったが、広がった版図の運営とこれを守る軍を維持することも必要となり、エジプト、北アフリカ、スペインなどの地中海沿岸やドナウ川沿岸などの遠隔地での食糧生産が行われるようになった。

遠隔地の属領を管理する組織や、国境を守るために戦う軍は生産に直接関わるのではない多くの人々を抱える。こうした非生産人口の増大は一般庶民の生活を苦しめることに帰結する。こうしたことは“歴史”の必然のように発生している。

こうした環境の下で生活したり戦ったりしていた人々が知覚した特殊な現象は多々あったはずだ。人々の無意識に内的沈殿したものも色々とあったはずだ。これが人々の意識的な働きかけと外敵具象化を引き出したことを読み取ることができる。

意識的な働きかけは経済的なもの、政治的なものなど色々とあった。同時期にローマ人や属領の人々の無意識に内的沈殿したものが、心の救いを求めることにつながっていくものだった。

ギリシャ・ローマの伝統的な神々はそのような役割を担うことはできなかったことが、この内的沈殿を増大させることになった。こうしたプロセスを踏んで姿を現したのが、外的具象化の結果としての基督教の誕生だったのだ。人間集団の無意識に内的沈殿したものの外敵具象化である基督教には、多くの人々が帰依していくのは当然のことだったろう。

こうして基督教はローマ帝国傘下の人々の中で多数派を形成することになった。帝国を支配する階層の人たちにとって、基督教は国を治める上での有力な手段としても受け止められるようになったのは当然の成り行きだったろう。こうして基督教は政治的にも支配力を持つようになった。この延長線上に基督教支配の中世の文明が花を咲かせたのだ。

基督教支配の中世においても、その文明の下で生活し活動する人間集団は多くの現象を知覚し、それに基づいた働き掛けを行なってきた。それと同時に、無意識に内的沈殿を積み重ねていった。中世から近世への時代の変化を見れば、意識的働き掛けや、内的沈殿からの外的具象化が見て取れる。

宗教の支配の下での人々の生活には、貧しいながらも精神的安寧がもたらされたかのように見えるが、そうではなかった。イスラム教勢力のイベリア半島経由での侵攻や東ローマ帝国への圧力などがある一方、ヨーロッパの域内では王権争いの頻発などで混乱状態が続いていた。

そんな中でイスラム教勢力との間で起こったのがトゥール・ポアティエの戦いであり、その勝利が契機となって、封建制の萌芽が生まれた。勝者カール・マルテルが教会領の没収を強行して、騎士に貸与（恩貸）したのである。

これは（ローマ帝国とは違う形だが）明らかに領土防衛の手段だった。そして、この制度は西欧全体に広がっていったのである。こうしたことの根源にあるのは、人間の生きる世界における現象の知覚とその世界への働きかけ、内的沈殿と外敵具象化だと言えるだろう。

このようにして確立された宗教支配と封建制度の下で生きる人々もまた、自分たちが生きる世界で現象を知覚し世界に働きかけていくと同時に、内的沈殿を積み重ねていった。この内的沈殿から生まれた外敵具象化が、ルネッサンス、宗教改革、絶対的王権の実現、科学的探求、等々だと受け止めることができるだろう。

こうした現象の知覚、世界への働きかけ、内的沈殿、外敵具象化という内的反応と外的行動の繰り返しと積み重ねが、中世から近世へ、近世から近代への時代の流れを体現して、自由、民主主義、人権、資本主義、科学の方法といったものを基盤とする西欧近代主義文明を形成していったのだ。

古代の日本は力のある豪族が乱立する世界だった。それは原始的な暴力の発現による覇権争いの世界だった。凄惨な殺傷と蹂躪がまかり通り、阿鼻叫喚が繰り返されていた。

こうした世界に生きる人間集団は様々な現象を知覚し、この世界で生きるための意識的働き掛けを積み重ねていった。殺傷能力の高い武器の開発や、統率能力の高い大王の下への多くの豪族の臣従といったことが、これに当たる。

同時に、この人間集団の無意識内には内的沈殿が積み重ねられていった。この内的沈殿は無意識内で熟成され、外的具象化の機会を窺っていたのだ。この外的具象化の機会が仏教伝来だったと言えよう。

この外的具象化の過程で仏教の可否を巡る争いが起こって仏教帰依派が勝利し、その結果、聖徳太子の17条憲法の発布につながっていった。これ以降、仏法は国家鎮護の有力な手段となったのである。

日本の平安時代は、朝廷とそれを動かす公家の権力の下にあった。そこに比叡山の仏教勢力も強く関わっていた。武官の最高位は、宮中の警護を司る近衛府の長官である近衛大将でも、官位相当は従三位だった。

この地位を兼官することが当時の昇進に有利だったこともあって、武官としての実質を持たぬ公卿が兼官を渴望する地位だった。それゆえに、結果として大臣や大納言が兼務することも多かった。

こうした状況の下で、天皇や上皇の警護、蝦夷征伐、朝廷内の権力闘争、瀬戸内海の物資輸送の警護などの領域で武力の重要性が高まり、実質的に機能する武力を持つ武家が徐々に頭角を表してくるようになった。源氏や平家の台頭である。

保元の乱と平治の乱を経て平清盛が武家の頂点に立ち、播磨守、大宰大貳に任じて京都の食料供給と瀬戸内海の通商を一手に担うようになり、巨大な経済力を手中にすることを通して、六波羅の本拠地に圧倒的な手勢を養うこととなった。

こうした推移の中で、人間集団の無意識内に内的沈殿が積み重ねられていった。源氏と平家の力が底流にあった、武力による権力奪取の繰り返しが、その外的具象化を促すこととなり、鎌倉幕府という武家政権が誕生したのである。

武家政権の下で応仁の乱が勃発した。戦国時代はそこから始まったと言われている。この戦国時代には、領国を支配下に置いた諸大名たちが武力抗争に明け暮れていたと受け止められているが、ただそれだけではなかった。

武力抗争に勝つためには経済で優位に立つ必要がある。それが明らかになったのがこの時代だった。武力の後盾が経済力であることは、播磨守と大宰大貳とを兼任していた平清盛の隆盛が証明していたのだが、一般的に認識されるようになるまでに多くの時間を要したのだ。

当時の経済力の基盤は農業と通商だった。平清盛はその両方を握ったのだが、戦国大名の多くは農業を基盤としていた。通商の重要性に気付いたのが織田信長だった。通商を重視する領国経営は常備軍を可能とし、傭兵を使うことも可能にした。

農業を基盤としていた武田信玄は、傘下の兵たちの意欲を高めるために占領地での略奪を認めていた、といった記録もあるようだが、兵力のほとんどは農業を兼業する人々だったようだ。

世が乱れて武力抗争が多発する時代には、通商を優先する重商主義が優位に立った。やがて天下が統一されるに至り、頭をもたげてきたのが重農主義であった。生産活動に専念できる時代には、基本的な価値を生み出す農業が望ましいとの認識があったのだろう。

関ヶ原の合戦は、重商主義陣営と重農主義陣営の戦いで重農主義が勝ったと解釈する所論もある。事実、江戸時代は、通商以上に農業が重視される社会が展開したのだ。しかも武力の重みは低下し、経済力こそが力の源となっていた。

こうした時代の流れの中で、多種多様な内的沈殿が人間集団の無意識内に積み上げられていった。それが幕末の政治的混乱を切っ掛けとして現れてきたのが、明治維新という外的具象化だったのだ。富国強兵、殖産興業という基本方針は、経済力こそが力の基礎であり、武力は経済力を基盤とする総合力の一部と見られていたことを示している。以後の流れをたどってみればこうしたことは明らかだろう。

西欧の時代の流れと、日本の時代の流れの過去を代表する部分を、現象思考学から考察してみたのが上記の概要である。時代の流れ、言わば歴史を作っているのは超自然的な力でもなく、自然界にあるような法則でもない。それは人間の集団の働きなのだ。

その働きとは、人間集団の無意識に起こる内的沈殿と、内的沈殿の外的具象化との一連の運動が、文明の発生、興隆、衰退、消滅の過程を支配することなのだ。このように捉えることができる文明の推移の流れが歴史なのである。